

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2011～2015

課題番号：23401022

研究課題名(和文) 手話間の言語接触に見られるネイティビティの保持と変容の研究

研究課題名(英文) A Study of Retention and Change of Nativity in Sign Language Contacts

研究代表者

宮本 律子 (Miyamoto, Ritsuko)

秋田大学・国際資源学部・教授

研究者番号：30200215

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,900,000円

研究成果の概要(和文)：ケニア手話(KSL)とフィリピン手話(FSL)は、従来、アメリカ手話(ASL)の影響を強く受けた手話のひとつであると言われてきた。そこで、ASLとの接触によっても保持される当該言語のネイティビティ(Nativity)と影響を受ける要素とを丹念に記述する調査研究を実施した。その結果、KSLもFSLもASLの亜種ではなく、独自の統語・音韻・形態構造を持つことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Recently, a sign language typology has been put forward based on quite a number of cross-linguistic studies of sign languages. As Zeshan suggests (Zeshan 2008, 671), sign language typology can lead to theoretical challenging issues of nature of human language. In our study, we aim to add more information into data-base of descriptive study of under-investigated non-Western sign languages and contribute to more dynamic development of sign language typology. The target languages are Kenyan Sign Language (KSL) and Filipino Sign Language (FSL), both of which have been considered to be one of the ASL's sister languages just like Bolivian SL, Thai SL, Ugandan SL and West African sign languages. However, our investigations show that KSL and FSL are not subspecies of ASL, though there is quite a large number of borrowed words. The findings through the current research project would be then confirmed by a comparative research between different sign languages in the areas.

研究分野：言語学

キーワード：手話 ASL KSL FSL 言語接触 言語変容

1. 研究開始当初の背景

ろう者コミュニティの言語、手話言語の社会言語学的研究はこれまで少なくとも3つの相互に関連のある観点から行われてきた。すなわち、

(1) マジョリティの言語である音声言語とマイノリティの言語である手話との関係
(2) 手話が本当に「音声言語と同等の自然言語であるか」という疑問

(3) 音声言語の研究から導き出された社会言語学的モデルが手話研究に適用できるかという点である。

本研究は、これら3点を射程に入れた上で、さらに4つ目の点、すなわち、手話言語同士の接触で生じる言語接触の問題を、ともにASLの姉妹言語とみなされてきたケニア手話とフィリピン手話において考察する。

ケニア手話(Kenyan Sign Language: KSL)とフィリピン手話(Filipino Sign Language: FSL)は、従来、アメリカ手話(ASL)の影響を強く受けた手話のひとつであると言われてきた。同様の手話にボリビア手話、タイ手話(ASLとバンコク手話、チェンマイ手話の混交言語)、ウガンダ手話、マレーシア手話があると言われている。しかしながら、フィリピン手話やマレーシア手話に関する研究からの知見とケニア手話に関する我々の調査によれば、ケニア手話もフィリピン手話もASLとは別の言語であると思えるべきである。

そこで、手話言語間での相互干渉を研究するために、ASLとの接触によっても保持される当該言語のネイティビティ(Nativity)と影響を受ける要素とを丹念に記述することが必要となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、フィリピンとその周辺およびケニアとその周辺をフィールドに、ろう者コミュニティにおける言語接触現象に注目し、手話言語同士の接触で何が起きているかを記述することである。さらに、それが従来の社会言語学研究のフレームワークにどのように寄与できるかを探求することである。

3. 研究の方法

まず、各地の手話の統語・音韻(手話の音韻的パラメータ、すなわち、手の「形」「位置」「運動」のすべてにおいて)・語彙及び語用論の諸側面の綿密な記述をおこなう。その際、どのような変種があるのか、変種の差異はいかなる面で存在するのかを調べる。さらに、外来手話到来の経緯および固有手話と外来手話の共時的併存状況を調べ記述する。平成23年度から26年度においては、このような記述研究をフィールドワークによって行った。このうち、最終年度で、固有の手話のどのようなネイティビティが保持され、外来手話(本研究の場合はASL)の浸透がどの要

素において進んでいるのかに関する成果を国際学会で発表し、論文にして公表した。

4. 研究成果

(1) 音韻

ケニア手話(KSL)もフィリピン手話(FSL)も、アメリカ手話(ASL)の語彙に強く影響を受けているように見える。ただし、基本語彙(Swadeshの基本語彙100を手話用に修正したWoodwardによる基本語彙)に絞って調べると、KSLはASLの同族言語とみなせる共通語彙(cognates)が13-22%しかなく、また、non-dominantの基本手型(H2 handshape)、言い換えると無標の手型の分布においても、ASLほど種類が多くないなどの点でASLと同族とは言えないことがわかった(図1, 図2)

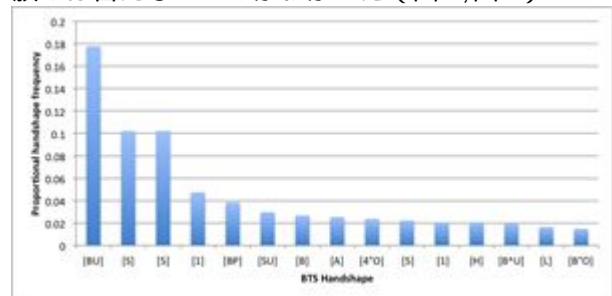


図1 ASLのH2の基本手型の分布 (Henner, Geer and Lillo-Martin 2013, p.3)

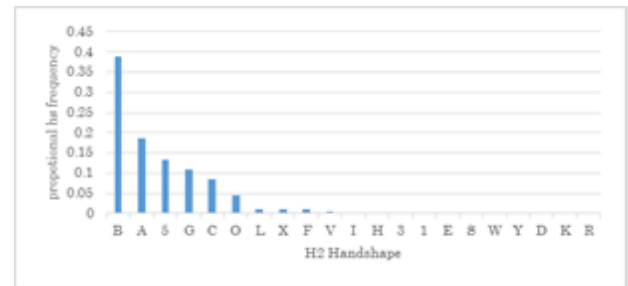


図2 KSLのH2の基本手型の分布

(2) 語順

KSLの動詞の分析において、SOV文例が非常に多いことがわかった。従来は、SVOが基本で、その他の語順は、ASLにならって話題化や固定表現など特殊なものだとされていたが、実際には集められた文例中最多がSOV文例だった(27.6%)。いずれも中立のNMMによる表現であり、NMMによる話題化がはっきりと認識できるものは外した上での比率が27.6%であるというのは、ASLと同語順であるという仮定に疑問を差し挟む余地が十分ある数字である。当然ながらASLにおけるSOV構文がどのような比率で存在しているのかも統計的に改めて確認して、これと比較する必要が出てくるであろう。この点は今後の課題である。

そしてKSLネイティブ・サイナーが、SVO文例はASL、SOV文例はKSLとして区別しているという事実もある。ウェイリー(Whaley)の類型論 Introduction to Typology The

Unity and Diversity of Language では、どの語順がもっとも自然なものであるかは、母語話者による直感、頻度、有標性がもっとも低い、コンテキスト独立的といった条件によって決まると述べられているが、ここでは「および」の条件があてはまる言語的事実である。

(3) 統語・形態

いわゆるテニエルの結合価(valence)をKSLの動詞について調べた結果、ASLで通常言われているような2価を超える動詞が存在することがわかった。音声言語を対象としたコムリーの類型論でも使役による3項の結合価の動詞についての分析があるが、手話の構文についてはもう少し丁寧な分析が今後必要である。

以上のように、音韻、統語・形態的な側面(語順やテニエルの結合価)からも、両言語ともASLの亜種とみなすことはできず、独自の統語・音韻・形態構造を持つことが明らかになった。

【引用文献】

1. Henner, Jonathan, Leah C. Geer and Diane Lillo-Martin (2013). 'Calculating Frequency of Occurrence of ASL handshapes.' Abstract of a paper presented at LSA 2013
2. Whaley, L. J. (1997) Introduction to Typology - The Unity and Diversity of Language, Sage Publications.
3. Woodward, J. (1996). "Modern Standard Thai Sign Language: Influence from American Sign Language and its Relationship to Original Thai Sign Language Varieties". Sign Language Studies, 92, 227-252.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

森 壮也, 「FSLは、どのようにASLと異なるか? -強調形にみる音韻の違いから見た考察-」日本手話学会第41回大会予稿集, 日本手話学会, 査読無。(2015).

Miyamoto Ritsuko, Soya Mori, Is Kenyan Sign Language a sister language of ASL? - An analysis of language nativity through comparison between KSL and ASL', 『手話学研究 第24号』, pp.17-30. 日本手話学会, 査読無。(2015).

森 壮也, 「フィリピン手話法とその直面する壁-政治と教育に翻弄されるフィリピン手話(FSL)-」, 日本手話学会第39回大会予稿集, 日本手話学会, 査読無。(2013).

森 壮也, 「日本手話におけるRS(Role Shift)を含む文の統語構造-ASLを初めとした他手話との比較の観点から」, 日本手話学会大会第38回大会予稿集, 日本手話学会. 査読無。(2012).

森 壮也, 宮本律子, Nickson Kakiri, 「ケニア手話(KSL)文の基本構造-ASLとは異なる基本語順-」, 日本手話学会第37回大会予稿集, 日本手話学会, 査読無。(2011).

森 壮也 「手話の音」, 『人と自然 -音をめぐる人と自然 音とことばの接点 2011年 No.2』, 16-19, 人間文化研究機構, 査読有。(2011)

〔学会発表〕(計5件)

森 壮也, 「FSLは、どのようにASLと異なるか? -強調形にみる音韻の違いから見た考察-」日本手話学会第41回大会, 2015年12月5日, タワーホール船堀.

Miyamoto Ritsuko, Soya Mori, 'Is Kenyan Sign Language a sister language of ASL? - a comparison between KSL and ASL', World Congress of African Linguistics 8, 2015年8月23日, 京都大学.

森 壮也, 「フィリピン手話法とその直面する壁-政治と教育に翻弄されるフィリピン手話(FSL)-」日本手話学会第39回大会, 鈴鹿医療科学大学 千代崎キャンパス, 2013年10月.

森 壮也, 「日本手話におけるRS(Role Shift)を含む文の統語構造-ASLを初めとした他手話との比較の観点から」, 日本手話学会大会第38回大会, 2012年7月, 群馬大学 荒牧キャンパス.

森 壮也, 宮本律子, Nickson Kakiri, 「ケニア手話(KSL)文の基本構造-ASLとは異なる基本語順-」, 日本手話学会第37回大会, 2011年10月, 関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス.

〔図書〕(計2件)

森 壮也, 「世界における自然言語としての手話」佐々木倫子 編『シリーズ 多文化・多言語主義の現在 5 ろう者から見た「多文化共生」 もうひとつの言語的マイノリティ』, pp.142-168, ココ出版。(2012). 全354ページ.

Miyamoto Ritsuko (編著) *Let's Learn Kenyan Sign Language*, Kenya National Association of Deaf. (2012). 全59ページ.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮本 律子 (MIYAMOTO, Ritsuko)

秋田大学・国際資源学部・教授

研究者番号：30200215

(2) 研究分担者

森 壮也 (MORI, Soya)

独立行政法人日本貿易機構アジア経済研

究所 (JETRO-IDE)・開発研究センター・

主任調査研究員

研究者番号：20450463